

海洋教育バイオニクスプログラムが始まる！
海をテーマにした学びを支援し、授業・活動・研修費用を助成

海洋教育がめざすもの

東京大学大学院教授／教育学研究科附属海洋教育センター長●田中智志



海を学び教えることがめざすもの、またその実践は、従来の教育と大きく異なりますが、海を学び教えることが、なぜ大切なのでしょう。大きく分ければ、2つの理由があります。

いのちのマトリクスとしての海

海を学び教えることが大切である理由の一つは、海がすべてのいのちの起源であるからです。「母なる海」という言葉があるように、原始の海から、生命が誕生し、私たち人類も誕生しました。地球は「プラネットブルー」と呼ばれていますが、そのブルーすなわち海は、いわば、いのちのマトリクス（母胎、いにかえるなら、源自然）です。

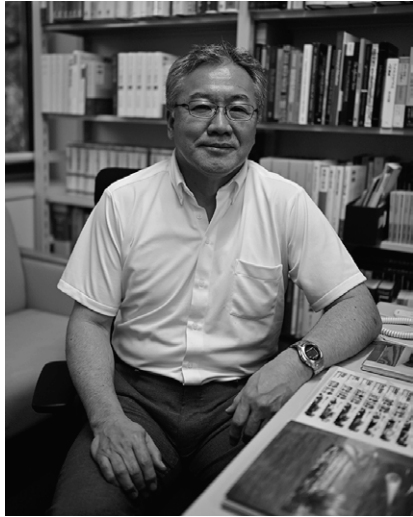
この海が、いつ、どのように生まれたのか、そして、そこから生命がどのように誕生したのか。それは、はっきりわかっていません。海の水の生成については、主要な仮説が三つあります。もともとあった説、周りから取り込んだ説、氷の天体が降ってきた説です。どの仮説も確かめようのないもので、たぶんずっと仮説のままかもしれません、そうした仮説を吟味し洗練していくこと、つまり「探求」が、自然科学的な海の研究（の一つ）です。いのちのマトリクスとしての海の探求は、自然科学的研究に限られません。たとえば、

宗教や神話を素材にしながら、人文科学的な研究をすることも可能です。キリスト教の場合、聖書の最初に「海」と思われるものが登場しています。

いのちの誕生という見えないものを見る試みは、研究者だけでなく、子どもたち一人ひとりが行う探求でもあります。最先端の科学研究に教えられつつ、自分なりの仮説を立て、それを吟味することや想像力をめぐらすことは、心を躍らせ、知性を豊かにする経験になります。

未来の大人たちに恨まれる教育でよいのか

海を学び教えることが重要であるもう一つの理由は、海が私たちの生活の基礎だからです。私たちがどこに住んでいても、何を食べていても、そうです。すべてのいのちは、生活の基礎、すなわち生きられる環境を必要としています。空気、水、食べものだけでなく、適度な温度が必要です。こうしたハビタブルな環境をつくりだしているものが、海です。ずいぶん前から、地球温暖化が問題になっていますが、海は、人間がつくりだした熱を溜めて、大気の温度が大きく上がらないようにしてくれているという事実を、みなさん



はご存知でしょうか。もしも海がなかったら、この40年間に、地球全体の気温は37度上昇しているのです。それはたとえば、30度の夏の気温が、67度になってしまふ、ということとです。いまの子どもが大人になったころには、夏の気温が50度を超えているかもしれない。もしもそうなつてしまえば、人間をふくめ、もう多くの生きものは、生きていけないことになるでしょう。

小学生の子どもたちにこの事実を話したら、自分たちの未来を心配して、「大変だ、どうしよう」と大騒ぎになると思います。だから、いまの子どもたちに恨まれないようにしないといけません。私たちは、海に感謝しつつも、温暖化そのものを低減させる努力を続けなければならぬのです。これはすべての人が担

うべき課題といえるでしょう。

われわれとしては、海洋教育を通じて、いかに人間の生存というのが、われわれの知らないところで脅かされているのかという事実を伝えていきたいと思っています。

人が海を大切にすることも教育の営み

海を学び教えることがめざすのは、こうした海洋の知見をつうじて、新しい倫理的スタンスを生成することです。先に述べたように、海は、いのちのマトリクスであり、いのちを支える環境、すなわちハビタビリティの必須条件 (condicio sine qua non) です。その事実を踏まえるとき、海は、個人、組織、国家の自己本位で恣意的な欲望や計画をはるかに超えた、大いなる存在として象^{かた}られていきます。すなわち、海に対する畏敬の念が生じるのです。それは、海洋の自然科学的知見が生みだす、新しい倫理的スタンスです。

その倫理的スタンスは、いいかえれば、与るというスタンスです。海という贈りもの (donum) に私たちが与ることです。すなわち、海を、人間や国家によって所有されるものではなく、いのちすべてに贈与されたものとして、それを大切にすることです。

教育学は、これまで、人間をよりよくすることを説いてきましたが、海という贈りものを大切にすることを十分に説いてきませんでした。私は、人が人を気遣い、大切にすることと、人が海という源自然を気遣い、大切にすることは、教育という営みの両輪であると考えています。

海洋教育の創造的実践

海洋教育の実践は、たんに海洋の知見や倫理を教えて、子どもたちに学習させることではありません。海洋教育の実践は、そうした情報提示／情報取得という伝達モデルで行われる実践ではなく、創造モデルで行われる実践です。すなわち、学習者一人ひとりが具体的な問いに取り組むなかで、海洋の科学的知見と海洋への倫理的スタンスを、みずから習得することに、教育者が有形無形の支援を行うことが、海洋教育の実践です。

海洋教育の実践は、新しいガバナンス構想という創造に向かうものです。温暖化にどう対処するのか。二酸化炭素の排出量をどう減らすのか。生物の多様性をどう保全するのか。気象災害をどう対処するのか。新しい海洋政策の構想は、子ども一人ひとりに委ねられています。

海洋教育は日本の未来を支える学校教育のテーマです

2018年度事例紹介

学校名 宮城県気仙沼市立気仙沼小学校

学 年 3年生～6年生

活動名 海との共生について考えよう

教 科 総合的な学習の時間

テーマ 6年生「気仙沼復興プロジェクト」



活動の進め方

海洋教育の実践においては、児童の海に関する知識やこれまでの生活体験を探究課題設定の場面に生かし、児童に課題を自分のこととして受け止めさせることを重視した。海に関するニュースを日常的に取り上げ、問題を自分ごと化するための探究の時間を確保した。

活動の成果

現在の海が置かれている状況の探究を通して問題を自分ごと化することができた。探究の成果として、年度末には児童一人ひとりが海と共生していくための課題と提案を行い、思い描く気仙沼市の未来構想について発表する場を設けた。海と生きるための市民としての行動力と考え方を育成することができた。



[助成金額]

地域展開部門：上限1000万円

単元開発部門：上限30万円

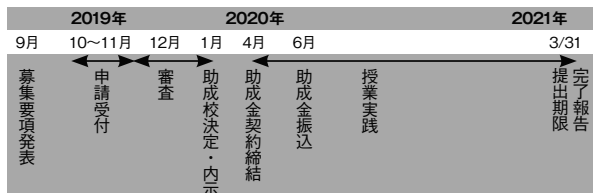
[申請受付期間]

地域展開部門：10月1日～30日

単元開発部門：10月1日～11月30日

[対象校決定・内示] 2020年1月予定

[助成金振込] 2020年6月予定



詳しくは、9月発表の募集要項をご覧ください。

<https://www.spf.org/pioneerschool/application/>



【気仙沼小学校海洋教育全体計画】

全体目標

海の環境や資源、海を取り巻く人や社会とのつながりについて関心を高め、海と共生しようとする考え方や行動力を身に付けた児童を育成する。

教科・領域を横断した学びの系統性を児童に実感させる授業実践

実践のキーワード

つなぐ

海につなぐ

海でつなぐ

海をつなぐ

カリキュラム・マネジメントの重点

授業で学んだことや日常生活で見聞きしたことを海と結び付けること。

授業で学んだことと日常生活で見聞きしたことを海を切り口に結び付けること。

海を介した気仙沼市と他国や他地域との結び付きに気付かせること。

5学年「海と人との共生について考えよう」

・自己の設定した探究課題を調べる（一例）～マイクロプラスチックは気仙沼にも影響があるか、サンマの漁獲量が減っているのはなぜか、貝毒が増えてきたのはなぜか。

6学年「未来の気仙沼」

・海に起因する環境問題の調査：地球温暖化、海水温上昇、海洋酸性化、異常気象
・海を守りながら利用しようとする地域の方の思いの聞き取り調査
・これからの海との向き合い方についての提案

海に親しむ学び

海を知る学び

海を守る学び

海を利用する学び

海洋教育パイオニアスクールプログラム

海をテーマにした学びを支援します。

授業・活動・研修費用の助成

海洋教育を通じた学校間連携・先生のスキルアップをサポート

全国300校が活用中

プログラム概要

【対象活動】

海に関わる授業実践や教材開発のための研究活動に対して助成します。
校外学習や体験活動、水産業や海洋生物、森里海や水の循環、防災学習など、幅広い対象を募集します。

【対象期間】2020年4月1日～2021年3月31日に実施される学習活動

日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

海洋教育センター
CENTER FOR OCEAN LITERACY AND EDUCATION



笹川平和財団

海洋政策研究所